NIHON FUKUSHI UNIVERSITY
日本福祉大学
国際福祉開発学部だより
News Letter
Faculty of International Welfare Development
October 2022 vol. 17

〒477-0031　愛知県東海市大田町川南新田 229　日本福祉大学 国際福祉開発学部

目　次

P.1　巻頭言
P.2　ワールドユースミーティング（WYM）実施報告
　　オープンキャンパスでの学部の学びの紹介
P.4　SDGsの達成に資する取り組みの紹介
P.5　地域連携の取り組みの紹介
P.6　国際連携プロジェクトの取り組み紹介
P.7　留学生が関わる取り組みの紹介
　　卒業生の紹介
P.8　「カンボジアマルシェ」の報告

国際福祉開発学部は、2022 年 10 月 22 日（土）～23 日（日）に、オアシス 21 銀河の広場で開催される「ワールド・コラボ・フェスタ 2022」に協賛し、ブースを出展します。ブースでは、学部の学びやその成果を紹介します。対面出展は久しぶりです。多くの人に出会えることを楽しみにしています。

「ウイズコロナ時代の学び」（学部長 吉村 輝彦）

国際福祉開発学部では、世界の人々の持続可能な『幸せ』のために、国際的なチームで協力して地球市民としての責任を果たすことのできる人、そして、グローバル化する中で、これからの国際社会や（多文化）共生社会をともに創る人を育てていくことを目指しています。そのために、キャンパスの中での学びに加えて、フィールドワーク、インターシップ、そして、ボランティア活動等多様な体験を重視し、現場に自らを置き、多様な人々と関わりながら、そこでの取り組みから学んでいくことを大切にしてきました。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大は、そうした機会をなかなか作りにくくしてきました。一方で、オンライン形式での様々な学びの機会が増え、また、オンライン形式でのコミュニケーションを通した可能性も感じさせました。同時に、対面形式での学びの価値も改めて実感させることになりました。

コロナ禍が続く中で、2022年度前期では、学部ならでは学びが実現できるように環境整備に努めてきました。また、学部の多彩な科目を通じて、デジタルへの対応やオンライン形式の良さを取り入れる等様々な創意工夫をしてきました。2022年度後期においては、より本格的に、コロナ禍において、実現できなかった様々な取り組みが対面形式で行われます。様々なチャレンジが続きますが、これからの時代を前向きに捉えて、何事もまずはやってみようから動いていきたい、そして、自分たちから、ウイズコロナ時代の学びのあり方を考えていきたいと思います。

ワールド・ユース・ミーティングの実施報告

2022年8月5日～６日に、第24回目のワールド・ユース・ミーティング（World Youth Meeting）が開催されました。ワールド・ユース・ミーティングは、国内外の高校生や大学生がチームを組み、英語でプレゼンテーションを披露する場であり、国際福祉開発学部の学部行事の中でも学年を超えて取り組む大きな活動です。

国際福祉開発学部では、1年生及び2年生が合同で学習する授業「国際交流ファシリテーション演習」を通して、当日までの準備や司会、海外との調整等イベントの企画・運営を行います。コロナ禍の影響もあり３年ぶりに対面を取り入れて開催となった本イベントは、本学をメイン会場としたハイフレックス方式で行い、国内外の高校、大学、合計60校が参加しました。 国内外の学校混合のチームごとに、プレゼンテーションは全て英語で行われます。各チームの持ち時間は10分です。ハイブリッドで接続された海外のチームメイトと息を合わせてのプレゼンテーションは簡単ではありませんが、各チームとも工夫を凝らした発表を行いました。全チームのプレゼンテーションが終了した後は、ゲームを交えて文化交流会が開催されました。プレゼンテーション時の緊張した空気とは打って変わってリラックスした雰囲気で異文化交流、異文化学習を楽しみました。

オープンキャンパスでの学部の学びの紹介

東海キャンパスで実施されるオープンキャンパスでは、教員から国際福祉開発学部の学びの特徴、在学生から学部での自分の学び、また、卒業生から学部での学びや現在の仕事内容を紹介しています。さらに、学部での学びを実際に体験することができます。ここでは、2022年5月8日（日）及び8月7日（日）に行われたオープンキャンパスから取り組みの一部を紹介します。

国際福祉開発学部では、クオーター制（1年を4つの学期に分けて授業を行うシステム）を導入し、2年生の第4クオーター（11月上旬）から3年生の第1クオーター（5月下旬）までを「アクティブラーニング期間」としています。この期間は、必修授業を配置していないことから、国内外で、長期的・集中的に、フィールドワークやインターンシップ、ボランティア、語学学習等、学生個々の興味・関心に応じて様々な活動に挑戦することができます。それらの活動を通して、「多文化コミュニケーション力」、「ファシリテーション力」、「問題発見解決力」を養うことが期待されています。なお、英語の教職課程へ登録している学生や留学生については、履修科目上、工夫した取り組みが必要になっています。

在学生のプレゼンテーションの紹介

このアクティブラーニング期間や学生生活の中で行った学習とその成果について在学生が発表しました。

◎4年生　坂下瑞萌さん

愛知県豊田市にある公益財団法人オイスカの中部日本研修センターで行った有償インターンシップについて紹介しました。同センターでは外国人に農業技術習得に向けた指導等を行っています。インターンシップを通して農業の大変さを知り、農家の方々の努力のおかげで今の豊かな生活が成り立っていることを実感しました。また、インターンシップ生向けではなく、職員と同じ仕事に従事させてもらうことで、職業観を育みました。

◎3年生　山本彩加さん

アクティブラーニング期間に、オンライン短期留学、町議会議員の下でのインターンシップ、英検準1級合格に向けた勉強、公務員試験勉強等様々な学習に取り組みました。特に障害者（児）の家族支援に関心を持ち、現場の需要と公的機関の供給とのギャップを知ることを目的に、11月上旬から3月末の5ヶ月間、NPO法人が運営する発達障害をもつ児童の福祉施設でボランティアを行いました。行政担当者へのヒアリングも行いました。活動を通して、障害児の保護者の支援ではなく、兄弟姉妹の支援の必要性を感じたため、今後はNPO法人で兄弟姉妹向け支援プログラムの企画に携わっていきます。将来は公務員を目指しています。

卒業生のプレゼンテーションの紹介

卒業生が学生時代の学びや活動を振り返り、社会人としてどのようにいきているのかについて、発表がありました。

◎堀田真也さん（名鉄観光サービス株式会社）

学部の 4 期生で、2015 年卒業。旅行会社で営業を担当しています。1年次に全員が参加する「国際フィールドワークⅠ」では、マレーシアのペナン島へ行き、様々な体験をしました。在学中にはアメリカのロサンゼルスに短期語学留学をしました。また、勉学だけでなく、地元のバスケットボールチームでの指導ボランティアにも情熱を注ぎました。旅行会社では、団体旅行セールス、企画提案、添乗業務を担っています。自分とは異なる分野・世界の人々と関わり、繋がりを持てることが魅力であると語りました。

学生時代に得た英語、福祉、多文化の知識やコミュニケーションスキルが、お客様への要望のヒアリング時や添乗時に活かされています。

◎岩下菜名子さん（株式会社イエス・システムエンジニア）

学部の 6 期生で、2017 年卒業。システムエンジニアとして、顧客から受注したシステムを開発し、業務の簡略化・効率化に寄与しています。在学中は、イベントの運営やプレゼンテーションの勉強を通してコミュニケーション力、チームワークを身に付けました。それが現在の仕事に活きています。プログラム等の技術的な資料は英語で書かれたものが多く、そういった本や記事を読む機会が多いため、英語の知識も役に立っています。

◎天野撫子さん（ドギーマンハヤシ株式会社）

学部の 6 期生で、2017 年卒業。将来はインドネシアと日本の懸け橋になりたいと、日本語を猛勉強の末、来日・入学しました。1年次のワールド・ユース・ミーティングでは、プレゼンテーション能力を高めるとともに、海外からの参加学生とかけがえのない時間を過ごしました。今でも SNS で繋がっています。また、「国際フィールドワークⅠ」では、マレーシア研修に参加しました。異なる言語・文化・民族のバックグラウンドを持った人々と交流することで、新たな価値観を知ることができました。現在の職場では、国際部門で、欧米・アジアへのペット食品・用品の輸出業務を担当しています。コロナ前は海外の顧客との商談のため、マレーシア、フィリピン、インドネシア、中国等へ海外出張をしました。事前準備として、訪問先の国の宗教・文化を調べたり、商品サンプルを用意します。学生時代に身に付けた事前に十分に調べ・準備することやプレゼンテーション能力が商談時に役立っています。

模擬講義の紹介

模擬講義では、砂原美佳准教授が「国際協力を学ぶ―世界と関わり、共に生きるために」をテーマに講義を行いました。砂原准教授は、行政学が専門で、これまで法律分野の国際協力に携わってきました。ここでは、国際協力を学ぶ意味や平等と公正の違いについての話がありました。全員が協力し合わなければ、柵の向こうで行われている野球の試合を見ることができない状況の絵を見て、平等と公正の違いについて説明しました。この絵を私たちの身の回りや国際社会で起きている問題をイメージしたものだとすれば、どんな事例があるのかについて、参加者とともに考えました。

◎日本語教師プログラムの体験

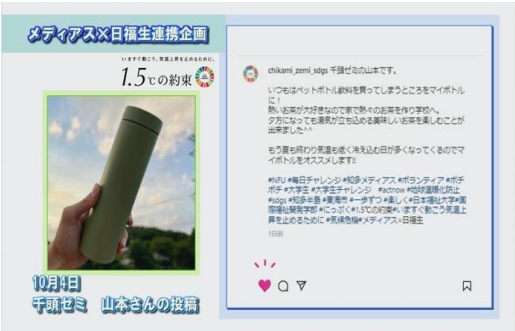
日本語教師プログラムの体験では、田中真由美助教と2021年に日本語教育能力検定試験に合格し、現在、日本語学校で非常勤講師としてアルバイトをしている3年生の閏間詩音梨さんが、日本語教師になるための方法や仕事内容について紹介しました。また、日本語のアクセントを線で書いてみる、それを4つのアクセントパターンに分けるアクティビティを行いました。

◎英語の学び体験

英語の学び体験として、World Culture Survival Quizでは、Gary KIRKPATRICK講師と2年生が進行を務め、「ケチャップ」の言葉の語源やタガログ語はどの国の言語かといったクイズを出し、参加者と在学生が協力して回答しました。

SDGsの達成に資する取り組みの紹介

国際福祉開発学部では、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に資する様々な取り組みを行っています。



千頭聡ゼミでは、SDGsについて学生の理解促進と地域の方々への普及のために、SDGsかるたやSDGsトランプ等を製作してきました。また、岩倉市と連携して、SDGsに取り組む市内の企業を学生が取材し、「広報いわくら」に記事として連載されるとともに、地元中学校の文化祭や児童館でのワークショップを行いました。10月7日開催のAICHI SDGs EXPO、11月6日開催の「あいちエコア

クション」でゼミの活動成果をブースで発信しています。さらに、国連メディアコンパクトに加盟している知多メディアスと連携して、温暖化防止を含むSDGs関連の6つの番組制作に協力し、サステイナブルファッションショー等に出演しています。また、企業と連携して、2年生6名が2022年2月に、SDGsに取り組む企業とSDGsに関心のある学生をつなぐマッチングイベント「就活×SDGs～サスティナブルな未来予想図～」を実行委員として企画立案し、運営しました。さらに、北知多フリモ６月号の巻頭特集「はじめてのSDGs」では、千頭聡教授とゼミ生が登場しています。

地域連携の取り組みの紹介

国際福祉開発学部では、東海市の大学連携まちづくり推進事業（※）を始め地域やNPO、また、自治体と連携した多彩な取り組みが行われています。ここでは、令和4年度に東海市大学連携まちづくり推進事業として採択された事業の中で、二つの取り組みを紹介します。

・「楽しい英会話」

国際福祉開発学部の米津明彦教授と教職課程に登録している3年生ゼミ生による東海市イングリッシュ・サロン「楽しい英会話」が、2022年7月から12月まで毎月一回（全6回）実施されています。学生らは中学・高校の英語の教員免許取得を目指しています。5月から7月まで、東海市の小学校・中学校で約10日間のインターンシップを行い、子ども達との接し方を学びながら、今回の「楽しい英会話」に臨みました。この事業では、子どもたちが英語に慣れ親しみ、参加者同士が交流できるように工夫するとともに、広い視野で英語教育について考え、協働して企画・実践することが期待されています。

・「にっぷく生とあそぼ２０２２」

東海市芸術劇場において、8月1日と5日の2日間、「にっぷく生とあそぼ2022」と題し、地元の小学校3年生から6年生までの児童を対象に、夏休みの宿題を教えたり、外国の文化を伝えるイベントが行われました。このイベントは、田中真由美 国際福祉開発学部助教と同ゼミ生を中心とした学生が26名（日本人14名、ベトナム・中国・インドネシア、ネパールにルーツを持つ留学生等計12名）が子どもたちと学びを通じた交流を行いました。会場には留学生が自国の文化を教えるコーナーや日本人学生が夏休みの宿題を教えるコーナー等5つの企画が用意されました。留学生が担当するコーナーでは、ベトナムやネパール、中国、インドネシアといったそれぞれの国の民族衣装を身に着けた学生が、子どもたちに文化や言語、生活について伝えました。また、日本人学生が担当するコーナーでは自身の得意とする楽器や習字を教えました。

※東海市において、「大学の教育研究活動」や「学生の活力」を生かした地域課題の解決や地域の活性化などの一層の推進を図るとともに、地域社会との関わりのなかで得られる学生の学びと成長の機会を創出する制度として2017年度に創設されました。

国際連携プロジェクトの取り組み紹介

国際福祉開発学部の教員は、様々な国際的なプロジェクトに取り組んでいます。ここでは、佐藤慎一教授が関わる二つのプロジェクトを紹介します。

・「JICA草の根技術協力事業」

JICA草の根技術協力事業に採択された本プロジェクトでは、「地方教員養成校が導く地域 ICT モデル校の実現～音声・動画でモバイルラーニング」をテーマに、カンボジアの農村地域における教育改善を目的に、カンボジア現地の教員養成校（PTTC）と連携して実施しています。本事業では、PTTCの卒業生が赴任する／している小中学校からモデル校を10校選定し、子どもたち中心の学習の実現および普及・促進を目指しています。モデル校とは、日本の学校とオンライン遠隔協働授業も行っていく予定です。

写真：本学学生との協働プレゼンテーションの様子

この事業を通じて、PTTCの教員・学生とのオンラインセミナーを、Zoom等により毎週のように実施しています。8月には、PTTCの卒業生でモデル校となる小学校で勤務する教員が、本学部が主催する国際交流イベント、ワールド・ユース・ミーティング（WYM）に合わせて来日した。探究学習やICT活用の先進事例として、瀬戸SOLAN小学校、立命館大学、内田洋行 Future Classroomを視察等を行い、今後の教育のあり方や学校間連携についての議論を深めました。WYMでは、来日したモデル校教員1名、現地からのオンライン参加のモデル校教員1名と本学学生とが協働して、カンボジアにおける教育の未来に関するプレゼンテーションを行いました。

写真：カンボジアからの来日メンバー

・「国際青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプログラム）」

さくらサイエンスプログラムに採択された本プロジェクトでは、「情報科学による継続的な国際連携と環境保全」をテーマに、カンボジアの教員養成校（PTTC）の教員・学生が日本の事例を視察し、現地における環境教育の検討や、日本の学校との交流学習につなげていくことを目指しています。

9月5日から11日にかけて6名の教員と4名の学生が来日し、浄水設備や自動車産業の環境対策を学びました。また、内田洋行 Future Classroomの他、科学館や京都の世界遺産を視察し、こうした施設等と連携した現地での教育について考えを深めました。本学教員も日本の教育動向や関連技術の講義を行い、また、本学学生達も各種活動に同行し、支援・交流を行いました。

写真：Future Classroomの視察

留学生が関わる取り組みの紹介

国際福祉開発学部では、多くの留学生とともに学んでいます。ここでは、留学生が関わる取り組みを紹介します。

・附属高校の授業にゲスト参加

2022年6月16日（木）に実施された付属高校の授業「第7回 GFSⅡ（Global Fukushi StudiesⅡ）」において、国際福祉開発学部の留学生5名がゲスト参加し、「各自の出身国紹介（文化、食事、観光地等）」「日本福祉大学に進学した理由」をプレゼンし、その後グループに分かれて質疑応答を中心とした交流会が実施されました。付属高校と国際福祉開発学部の留学生との交流会は、今年度で3回目を迎え、高校生と留学生の双方にとって、大きな学びとなっています。

・留学生交流バスツアー

1年生～3年生の留学生を対象に、9月2日に留学生交流企画のバスツアーを実施し、国際福祉開発学部を含む、留学生39人が参加しました。普段の学生生活では、他キャンパス、他学年の留学生同士が交流する機会が十分にないため、留学生同士のお互いを知る良い機会とし、また、今後も支え合える交友関係の構築を目的に企画しました。初めはぎこちない様子も見られましたが、一日が終わる頃には、キャンパスや学部を越えて交流を深めることができました。学生らは終始、笑顔が溢れ、良いリフレッシュの機会にもなりましたので、今後助け合って授業に励んでいくことを期待します。

卒業生の紹介

写真：学生時代の取り組み

国際福祉開発学部の２年生向けの科目「国際福祉開発の仕事」に、学部の2期生で2012年度（2013年3月）に卒業し、現在は、福井県国際交流協会で働いている飯田隼人さんが登壇しました。発表のテーマは、「地元福井で多文化共生を考える」です。飯田さんは、福井県坂井市丸岡町の出身。高校時代のサッカーの経験と国際協力への関心が重なる中で、国際福祉開発学部に入学しました。

発表のテーマは、「地元福井で多文化共生を考える」です。飯田さんは、福井県坂井市丸岡町の出身。高校時代のサッカーの経験と国際協力への関心が重なる中で、国際福祉開発学部に入学しました。カンボジアでの国際フィールドワークやＮＰＯの活動支援、空き家活用プロジェクトを含めた様々な学部での学びを通して、「福祉」と「まちづくり」に焦点を当てていくことになりました。卒業後は、福井市内の福祉系企業に就職、その後、福井県国際交流協会に転職し、現在に至っています。

「カンボジアマルシェ」の報告

■2022年10月5日に、「カンボジアマルシェ」が、東海キャンパスの１階で開催されました。学部の1年次の科目「国際フィールドワークⅠ」のカンボジア研修でお世話になったNPOのCambodia Rural Development Tours（CRDT）が運営しているLe Tonle（クラチェ市にある宿泊施設兼職業訓練場）は、観光業・ホスピタリティ業で働きたい農村地域の若者を雇用し、教育・訓練しながら接客等の現場体験もさせる仕組みで、2019年までに267人の「卒業生」のうち95%が長期就職したという実績を誇っていました。Le Tonleは2020年春から、コロナ感染拡大の影響によるインバウンドの観光客の激減を受けて閉鎖されましたが、2022年末の再開を目指しています。ホテルの再開に向けた応援のため、学生主体のイベントとして企画されたのが「カンボジアマルシェ」です。同時に、「カンボジアマルシェ」を通して、東海キャンパスにおいて、他学部の教員や学生と交流する場づくりになればと学生は思っていました。「カンボジアマルシェ」では、コーヒーや紅茶の販売、クイズやゲーム、教職員のお約束抽選会、畑直送の野菜の販売、ベトナム雑貨の販売、フリーマーケット、余っている外貨の寄付等の企画が実施されました。想定以上の売り上げがあったと同時に、他学部の学生が多く来場し、学部を超えた交流も行われました。

写真：カンボジアマルシェの運営チーム

写真：Le Tonleスタッフからの応援写真

編集後記

今号のニュースレターは、2022 年度前半期の取り組みを中心に、国際福祉開発学部の学びの特徴を紹介しました。留学生を含めて多様な学生がともに学び合うキャンパス、そして、国内外のフィールドが在学生にとって学びの機会になります。また、卒業生からは、こうした在学時代の学びが力となり、自信に繋がっていることが語られています。これからも多様な学びの場を作っていきます。

（担当：吉村　輝彦）

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒477－0031　愛知県東海市大田町川南新田 229番地
TEL. 0562-39-3811　FAX. 0562-39-3281
編集人：国際福祉開発学部　学部長　吉村 輝彦
問合先：東海事務室　国際福祉開発学部担当（kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp）

NFU_KOKUSAI

学部教員紹介